

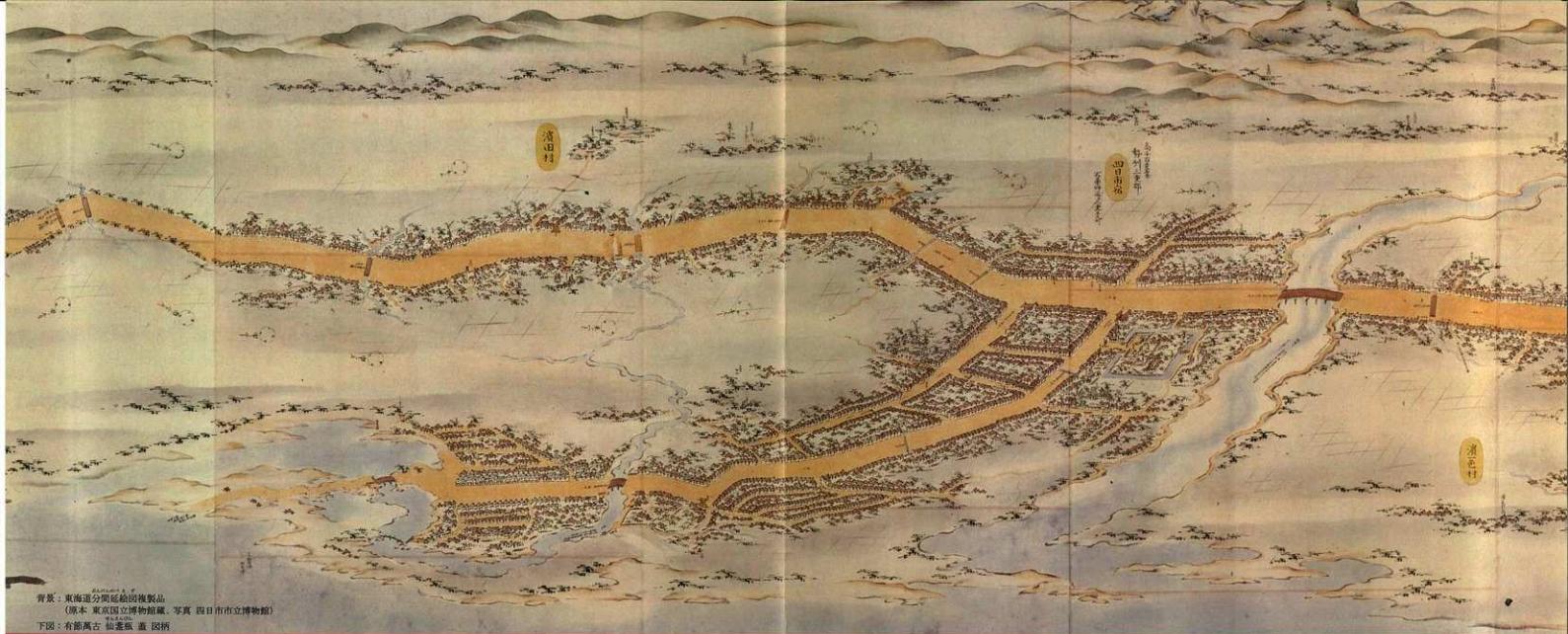
特別陳列

# 四日市代官所跡 出土品展

令和5年2月11日(土・祝)～3月12日(日)  
午前9時30分～午後5時 月曜日休館

四日市市立博物館(そらんぼ四日市)  
3階 時空街道 白里亭

主催 四日市市  
問い合わせ 四日市市シティプロモーション部文化課  
電話 059-354-8240



背景：東海道分冊絵図複製品  
(原本 東海道国宝博物館蔵、写真 四日市市立博物館)

下図：有部萬古・高瀬源、著、図説



●お重ねになったカタ (原不間・歌利翁)

公益財團法人美術文化財団・マモダミュージアム  
女優喜子、伊達春子

撮影：四日市市レディップローション御文化課

(撮影責任：川崎力志)

発行：四日市市 令和5年2月11日

家康と四日市		主	問	電
和暦	西暦	日時	い合わせ	問合せ
天正10年	1582	6月2日	本能寺の変	
		6月4日	四日市を経て(石川忠越留山)、三河大浜へ着岸(『忠志日記』)	
天正18年	1590		小田原攻めの後、関東へ転封	
			四日市場が家康の所領になる(『徳川家紀』等)	
文禄元年	1592		文禄の役	
		2月13日	九州名護屋へ向かう際に熱田～四日市へ渡海	
慶長3年	1598		江戸内府家康殿中代富水谷久左衛門光勝(志近神社碑札)	
慶長5年	1600		会津・杉原義成のため京都伏見から江戸へ向かう	
		6月20日	夜、四日市～三河佐久島へ、翌日着	
		9月	聞ヶ原の戦い	
慶長6年	1601	1月	宿駅山馬制	
		11月	四日市南屋代官水谷九左衛門光勝の所で浴まる(『御三二付四日市湊御由縁之舊奉申上候書』享和3年)	
慶長8年	1603	2月	征夷大将军に命じられ、江戸幕府を置く	
慶長20年	1615	正月	四日市～熱田へ渡海(『徳川綱業録』)	
		4月	大坂東の陣	

## I 家康と四日市

江戸時代の東海道は、慶長5（1600）年に関ヶ原の戦いで勝利した徳川家康が、翌慶長6（1601）年に宿駅伝馬制によって人馬の提供を義務付けで整備した幹線道路です。家康と四日市の関係は、天正18（1590）年に家康が小田原攻めの後に江戸へ転封した際に、四日市や関といった、後に東海道として整備されることになる交通の要所を豊臣秀吉から貴い受けたことに端を発し、実際に往来に利用していました。

四日市代官所は幕府領支配の拠点で、市内北町の中部西小学校の場所にありました。家康が江戸幕府を開いた慶長8（1603）年に建てられたとされていますが、家康が所領した後に、防衛施設としての堀と土塁を伴う宿泊施設としての建物を建てた可能性が高く、その建物が代官所に使用されたと推定されています。



1. 江戸時代後期に描かれた四日市宿陣屋絵図(個人蔵)

## II お茶の文化とおもてなし

四日市代官所跡からは天目茶碗をはじめ風炉・建水・葉子鉢などの茶道具類が多数出土しており、盛んに茶のものでなしが行われていたことが知られます。なかでも、煎茶道で用いる水差しの仙蓋瓶の蓋が出土していることは特徴されます。【6】は古萬古の赤絵幾何文様を織細かつ緻密に描いてることから有節萬古とみられます。

また、食材となる地物の蛤や伊勢志摩でしか取れない鮑の貝殻などが出土していることも特徴です。蛤は大きな貝殻は劣化が著しく、小さなもののはさほどでもない点に注目すると、『四日市宿本陣清水家文書』に記録されているように、大きなものは焼き蛤として、小さなもののは蒸し蛤やむき身の煮物などで食されていたとも想像できます。



8. 角を模した陶器(蓋)

9. 古萬古 交趾零毫蓋合  
【四日市市立博物館】

10. 甜白 人物の描かれた  
小杯(建水)

11. 出土した茶道具各種



3. 天目小窓が出土した土坑



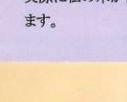
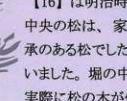
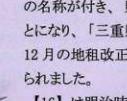
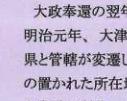
4. 陶器 天目小窓(道戸・口径 6.5 cm)



5. 鳥の絵



13. 八咫烏が描かれた木製容器の蓋(上)とその裏面(右)

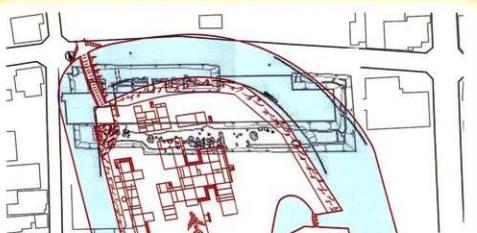


## III 代官所とその界隈

代官所の堀からは、多数の木製品も出土しました。地下水位が高い状態で15年以上もの間、土の中に埋もれていたために残っていたのです。【13】は鳥居・八咫鳥・松を描いた容器の蓋で、熊野信仰を表現しているものとみられます。【14】は、三昧線の撥と考えられます。江戸時代にオランダ商館の医師ケンペルが記した旅行記には、四日市宿のにぎわいの様子が記録されており、熊野比丘尼がいたとされています。三昧線は街中で彈き流しをする熊野比丘尼の持ち物でした。

また、度々、大地震にも見舞われており、嘉永7（1854）年6月の伊賀盆地を震源とするM6.9の地震によって建物が倒壊し、片づけに480人の人夫が出たことが知られます。したがって、出土したこれらの資料は、代官所の執務に用いられていたものばかりではなく、代官所の堀の周囲の様子も窺い知ることができる資料といえるでしょう。

なお、【15】は萬葉北斎が「四日市」を描いた浮世絵ですが、四日市といえば、「日永の追分」の印象が強かったことが分かります。



5. 調査時の平面図と絵図の位置関係

## IV 新たなる明治時代へ～三重県庁として～

大政奉還の翌年、慶応4（1868）年に代官所は廃止され、改元されて明治元年、大津県の出張所として利用されます。更に、度会県・安濃津県と管轄が変遷し、明治5年3月から三重県庁となります。その際、県庁の置かれた所在地がこの「三重郡四日市町」だったことから、「三重県」の名称が付き、県名は今日に至ります。一方で、県庁は翌年津へ戻ることになり、「三重県支所」として利用されていましたが、明治9（1876）年12月の地租改正に伴う伊勢暴動により焼き討ちにされて焼失し、堀も埋められました。

【16】は明治時代初期に代官所の裏門からの景色が描かれた絵画です。中央の松は、家康が自分の馬を繋いだという伝承のある松でしたが、伊勢暴動の際に枯れてしましました。堀の中からは松ぼっくりも出土しており、実際に松の木が付近に存在していたことが知られます。

